

出稼ぎ型労働移動と村の変化

—— インド・ビハール州の一事例 ——

おし かわ ふみ こ
押 川 文 子

はじめに

- I 調査村の概況
- II 出稼ぎ型労働移動の形態
- III 出稼ぎ先における相互扶助の枠組
——カルカッタの場合——
- IV 出稼ぎ型労働移動とB村の変化
おわりに

はじめに

ビハール州の州都パトナからカルカッタ方面にインド東部鉄道を約3時間半走ると、はじめガンジス河に沿って東に向かっていた線路はやがて東南に方向を変え、車窓からはなだらかな山波が見えてくる。この一帯は後進州と呼ばれるビハール州のなかでもとりわけ農業発展の基礎的条件の整わない地域の一つであり、北ビハールのムザッフェルプル県 (Muzaffarpur District) などとならんでカルカッタや西北インドに向けての出稼ぎ型労働移動の多い地域でもある。筆者はインド滞在中、この南ビハール平野と山地部の境界に位置するムンゲル県 (Monghyr/Munger District) 南部の一小村を数回にわたって訪れる機会を得た。この小文はその折、村の人々の話のなかから知ることのできた村の生活の変化に関するノートである(調査村のおおよその位置は第1図参照)。

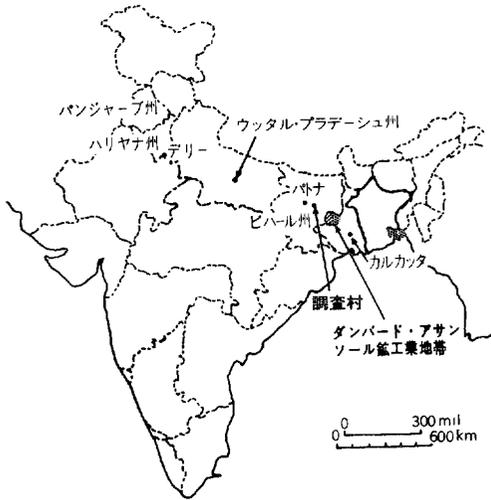
筆者の訪れたB村は、行政上、指定カースト・後進諸階層として区分される人々が人口の大半を

占める小村であった。灌漑設備はほとんどなく、農業は天水にたよる夏の米作・とうもろこし、浅井戸灌漑による冬の小麦・じゃがいも・ジョワール、それに若干の砂糖きびと豆類といったところで、ほぼ全戸が自家消費分を上廻る生産をあげることができない貧しい村であり、男子単身の労働移動(出稼ぎ型労働移動)が村の再生産構造に不可欠な部分となっている。

上位カーストの欠如、それと関連して地主・富農層が村内にいないことなどこの村はビハール州はおろかムンゲル県南部をとってみても「典型的」な村落ではない。しかしこの村における農村社会の変化はいくつかの点において、興味深い視点を与えてくれるものであった。

その一つは、村の側から見た出稼ぎ型労働移動のもつ意味である。ビハール、ウッタルプラデーシュ両州は、北インドにおける労働移動の主要な「出し手州」であり、インド全体で見れば労働移動の性格は多様化しているにもかかわらず、これらの州からの移動労働者、とりわけカルカッタへ向けてのそれは依然として、(1)長期にわたる男子単身移動、(2)教育水準の低さ、(3)都市の特定の雑業部門やジュート工場など「土地っ子」との競合の少ない業種への集中などの特色を持っている(註1)。またビハール州の場合、従来から多かったカルカッタ方面に加えてパンジャープ州、ハリヤナ州

第1図 調査村の位置



などでの季節農業労働、北インド各地での建設労働等への出稼ぎ型労働移動も増加しており、その村落社会に与える影響は今後とも増大するものと予想される。村のなかから誰が、どのようにしてこのような労働移動に出るのか、出稼ぎ型労働移動と村内の社会関係との関連、村の社会関係や農業に与える影響、もたらされる生活様式の変化の性格と程度、等々をこの村の事例から考えることができよう。

第2点は、農業の発展の遅れている地域での指定カーストのあり方や地位の変化(その方向・可能性・限界)を考えるうえでの視点である。この村の場合、上位カーストの欠如や比較的早い時期からの出稼ぎ型労働移動による送金の存在などの事情によって、指定カーストの村内における地位は隣村と比較したとき経済的にもまた社会的にもかなり高くなっている。しかし、現在、かつて指定カーストの地位を上昇せしめてきた要因のいくつかは消滅しており、今後の指定カーストの地位の向上の難しさを予想させている。また、その過程で

指定カーストに分類される各カースト間、あるいは一つのカースト内部での社会・経済関係にも微妙な変化をきたしている。こういった諸点は農村における指定カースト問題を考えるうえでの一つのヒントになると思われる。

第3点は、このような地域における農村開発政策に関する問題である。調査村は1970年代後半に「干害多発地域プログラム」(Draught Prone Area Programme, DPAP と略す)の実施されたブロックに属し、現在は「総合的農村開発プログラム」(Integrated Rural Development Programme, IRDP と略す)の対象村となっている。この村の事例は、出稼ぎ型労働移動の大量に存在し、しかも農業発展の条件の整わない村におけるこれらの政策の実施状況、意味を考えるうえでの一つの事例となろう。

もとよりこのノートは本格的な調査にもとづくものではない。データは村の人々との会話、パンチャット関係者、BDO(ブロック開発官)等からの聞き取りが主要なものである。村を訪れた日数は、1983年7月から12月にかけて計約45日、その間は村から約3日の距離にあるガンディー主義者の共同農場に宿泊した。またカルカッタで、この村出身の移動労働者を訪ね聞き取りを行なった。調査票、アシスタントは使用しなかった。したがって、このノートは資料上かなり不備な点を含んでいることをおことわりしたい。

(注1) 佐藤宏「インドにおける労働移動の諸類型」(『アジア経済』第25巻第3号 1984年3月)。

I 調査村の概況

ここでは、出稼ぎ型労働移動を考えるうえで重要であると思われる位置・交通、村の形成過程、

農業等の経済活動について、調査村の簡単な紹介を行ないたい。

1. 位置・交通

調査村Bは、ムンゲル県南部ジャムイ準地区(Jamui Sub-Division)に位置する。県都ムンゲルとジャムイを結ぶ州道に面しており、B村からこの州道を約1㎞で隣接する大規模村P村、3㎞で高校のあるM村、約10㎞でブロック・オフィス所在地Lに達する。州道を南西方向に約10㎞でインド東部鉄道の急行停車駅ジャムイ駅、16㎞でジャムイ市街に達する。ジャムイ駅から鉄道で北西約100㎞、約3時間半ほどで州都パトナ、逆方向に約300㎞、10時間ほどでカルカッタに達し、アサンソールやダンバードを中心とする鉱工業地帯はその中間に位置する。

隣村M、Pの州道沿いには日用雑貨を扱う商店が並び、ブロックの中心地Lとジャムイ駅周辺には商店街がある。ジャムイ(人口3万6000人、1981年)は、カレッジ、病院、映画館等のある地方都市である。B村の人々の日常の買物は村内にある商店および隣村M、Pでほとんどまかなわれており、必要に応じてジャムイまで出かけている。上記のような州道にそった生活圏の広がり比べると州道から離れて点在する村々との関係は弱い。州道から北側には、「ジャングル」と呼ばれる山地に沿ってサントラル村^(注1)、プーダン運動^(注2)によって1950年代から60年代にかけて形成された指定カースト、あるいは指定部族の単一コミュニティの小村が、また州道の南側にはムスリム人口を多く含む在来村が点在するが、筆者の見たかぎり、これらの村々との交流は特定の物品(たとえばサントラル村から乾燥マファ花やマファ酒、ひよこ、など)の購入にかぎられている。B村には大量の雇用労働を必要とする経営規模の農家がないこと、商業面

でも隣村P、Mが中心であることがその理由と思われる。通婚圏はどのカーストでもほぼ10㎞から50㎞の範囲に集中しているようである。

以上のような日常の生活圏を越える村の世界の拡がり、鉄道にそって、ビハールと西ベンガル州境の鉱工業地帯とカルカッタに延びている。パトナは距離的にはカルカッタの約3分の1にすぎないが、出稼ぎ型労働移動の行き先としては全く意味を持っていない。パンジャーブ、ハリヤナ方面にも鉄道が直通しているが、今のところB村からの大規模な労働移動は見られない。つまりB村は、州道に沿った日常生活圏を持ちつつ、カルカッタおよびビハール、西ベンガル州境の鉱工業地帯の後背地という性格を色濃く持っており、これらの地域の経済状況に強く依存している。

2. B村の形成過程

B村の古老たちの話によると、この村の形成は19世紀後半、おそらくは1880～90年代に始まる。当時、現在のB村付近はジャムイ駅の近くに本拠をおくラージプートのザミンダールの所領内にあり未開墾地であった。開墾のために、ザミンダールはその所領内にあった他村から土地を持たない人々を入植させ一定の土地を与えた。現在B村のカースト構成が指定カースト・後進諸階層に著しく偏っているのはこのためである。B村を含むこの地方一帯の最終査定調査は1907～08年に実施されているが、そのときに作成された地図をみると現在の耕作地の大半がこの時点までに開墾されていたことがうかがえる。その後、ザミンダールの直接経営下にあった土地の保有権も次第に村民によって買い取られた模様であり、最終的には、1970年代の土地所有上限法の実施によって旧ザミンダール一族はB村内に所有していた土地の全てを手離している。

第1表 B村のカースト別の家屋数、世帯数¹⁾、人口²⁾ (1983年12月)

カースト名 ³⁾	家屋数 ⁴⁾	世帯数	人口	1世帯 当り人数
ヤクダ (ラウル)	13 3	27 6	135 42	5.0 7.0
モテ (サリ)	2(2) 12	3 16	18 97	6.0 6.1
ナ (ターク)	8	13	70	5.4
ド (ラジャク)	15(1)	21	121	5.8
チャ (ラビダース)	46(1)	61	401	6.6
ド (パースワ)	13	15	91	6.1
ム (マサン)	10	19	111	5.8
計	122(4)	181	1,086	平均 6.0

(出所) 筆者調査による。

(注) 1) 土地が未分割でも、出稼ぎ収入が主たる所得源で、かつ、別々に仕送りされている場合は別の世帯とした。家族を伴って村外へ移動している場合でも、村に土地と家屋または家屋が残されており、かつ年に1度以上帰村する世帯を含む。

2) 出稼ぎ中の人口を含む。指定カースト、人口比は67%。

3) かっこ内は自称名。

4) かっこ内はパッカー。パッカーとはレンガまたはセメント等によって造られた恒久的住居。

ザミンダール時代には、B村の北側に接するV村に居を構えていたザミンダール一族に属する一家が地租徴収にあたり、また、1930年代には、このザミンダールがB村の西端を貫通して流れる小河川にチルカ(堰提)を建設する等の事業も行っている。なお、隣村P、Mは隣接しているもののザミンダールを異にしており形成上の関連は薄い。このような村落形成の事情によってB村は、カースト構成においては上位カーストを欠くものとなり、また、通例土地を所有することの少ない指定カースト人口も、わずかではあれ土地を持つという特殊性を持つことになった。

なお、現在B村は旧ザミンダール所領下にあっ

た他の数カ村の小村とともに同名の行政村Bを構成している。行政村Bに含まれる数カ村のなかには、前出のサンタル村、ブーダン運動によって形成された村落等が含まれているが、各村落間のつながりは薄い。行政村Bは、隣村V、P等とともにグラム・パンチャヤットを構成しており、行政村Bからは2名の委員を出している。現在は、この2名ともB村から出ている。この点については第IV節で詳しくふれる。

3. カースト構成^(注3)と経済活動

第1表はB村のカースト別人口構成である。B村には9カーストが居住しているが、このうち4カースト、人口の約3分の2が、行政上指定カーストとして分類される人々である。農業のみによって生計を立てている世帯は全世帯の約2割にすぎず、約74%の世帯が農業に加えて、村内・村外の労働、あるいはナーイー(理髪)、ドービー(洗濯)のような伝統的なサービスを、村内で食糧や日用品を扱う小店舗の経営等を行なっている。村内での賃労働によってのみ生計を立てている世帯は約6%、村外の労働にのみ依存している世帯(家族を随伴して移動している場合を含む)が約16%ある。

このような就業形態の背景には、B村における土地所有規模の極端な零細性がある。第2表は、聞き取りをもとに世帯を所有規模によって、I: 5ピガ以上(1.25%以上)、II: 2.5ピガ以上~5ピガ未満(0.63%~1.25%)、III: 1.0ピガ以上~2.5ピガ未満(0.25%~0.63%)、IV: 0~1.0ピガ未満(0~0.25%)、V: 土地なし、の5段階にランク付けしたものである。B村を含む地域の土地台帳の整備状況は悪く、各世帯の所有面積を台帳によってチェックすることが不可能であったため、この表も相当程度の誤差を含んでいると思わざるを得ないが、IVとV、つまり所有規模が1ピガにも満

第2表 B村のカースト別土地所有状況

(単位: 世帯数, かつこ内%)

カー ス ト	土 地 所 有 ラ ン ク					計
	I	II	III	IV	V	
ヤクモテ	1(4)	2(7)	3(11) 3(50)	20(74) 3(50)	1(4)	27(100) 6(100) 3(100)
ナド		2(13)	7(44)	6(38)	1(6)	16(100)
チドム		2(22)		3(33)	4(44)	9(100)
ヤクモテ	1(2)	2(10)	1(5)	16(76)	2(10)	21(100)
ナド		3(5)	8(13)	35(57)	14(23)	61(100)
チドム			4(27)	3(30)	8(53)	15(100)
ムサハ				9(47)	10(53)	19(100)
計	2(1)	11(6)	26(15)	95(54)	43(24)	177(100)

(出所) 筆者調査による。

(注) 土地所有ランク—I: 5ピガ以上(1.25ha以上), II: 2.5ピガ以上~5ピガ未満(0.63~1.25ha), III: 1.0ピガ以上~2.5ピガ未満(0.25ha~0.63ha), IV: 1.0ピガ未満(0.25ha未満), V: 0。

* 不明4戸を除く。

第3表 行政村Bにおけるカースト別

土地所有登録

(%)

[村外居住者]	33.7
近隣村居住者	20.4
ジャムイ等に居住する商人	13.3
[行政村B内居住者]	61.9
ヤクモテ	13.0
ナド	2.6
チドム	0.5
ムサハ	5.5
ラパサ	1.4
ムサハ	4.0
ラパサ	15.5
ムサハ	3.5
ラパサ	2.8
ムサハ	6.0
ラパサ	6.7
ムサハ	0.4
不明	4.4

(出所) 行政村Bの土地台帳から筆者集計。

(注) * ライ, パーシー, の2カーストおよびサンタルはB村には居住していない。

たないと返答した世帯が全世帯の80%近くになっていることから、その状況はうかがえよう。B村における最大所有規模はせいぜい5~6ピガ程度であり、その土地も大部分は浅井戸による灌漑が得られるのみであることを考慮すると、B村に

おいて何らかの形で農業を行なっている約4分の3の世帯のほぼ全戸が零細農であり、農業生産物の大半が自家消費にあてられ、さらにほとんどの世帯で食糧の不足分を購入している。

次にカーストと、土地所有規模の関連にふれる。第3表は、B村を含む行政村Bの土地所有を土地台帳によってカースト別に集計したものである。土地台帳によって見るかぎり、土地所有において圧倒的に支配的なカーストは行政村Bには存在せず、ヤーダブ、チャマールなどの人口の多いカーストの所有率がわずかに多いことが認められるにすぎない。B村のみに関してのカースト別土地所有率は得られなかったがおおむね行政村Bと同様であると思われる。聞き取りによるB村の土地所有状況を見ると、世帯数の多いチャマール、ヤーダブの場合には所有規模にはばらつきが大きく、ムサハル、ドッサド、ナーイー、モディの4カーストはきわめて零細ないし土地なしのランクに集中し、ドービー、クルミがその中間にあるという傾向がある。指定カーストであるチャマールに比

較的土地所有規模の大きい世帯が見られること
理由については次節で出稼ぎ型労働移動との関連
で詳しくふれる。所有規模のきわめて零細な4カ
ーストのうち、モディは主として店舗の経営を、
ナーイーは現在も理髪サービスによる現物報酬を
得ており土地所有がこれらのカーストの経済的地
位に占める割合は比較的小さい。ムサハルはこの
地方では従来、「ジャン」と呼称される隷属的要
素の強い年雇労働を行っていたカーストであ
り土地所有は原則的には認められていなかった。

土地の貸出、借入、刈分小作についての詳細な
データは得ることができなかった。この地域での
刈分小作は種子・肥料等を小作人持ちで、非灌漑
地の場合地主：小作=50：50、灌漑地の場合60：
40が一般的なレートで、周辺村では相当規模で行
なわれているとのことであった。B村については
筆者の知り得たかぎりでは、男子労働力の得られ
ない出稼ぎ世帯の一部で行なわれているにすぎ
ず、その規模も小さいものであった。刈分小作を
行ないたいが、土地を貸してくれる家がないとい
う話を何度か聞いた。

B村における作付パターンは、おおむね以下の
ようなものである。

- I とうもろこし—(秋作稲)—小麦・じゃがい
も・ジョワール
- II 夏作稲—小麦、じゃがいも、ジョワール
- III アルハル等の豆類、砂糖きび

B村には、掘抜井戸等による灌漑地がないため、
IとIIの選択は天水灌漑の条件によって決まる。
各々のパターンの占める割合についての資料を得
ることができなかったが、B村を含む地方は1981
年から3カ年連続の干害に見舞われ稲作は深刻な
被害を受けておりIのパターン、つまり夏作をと
うもろこしとする農家が増えているとのことであ

る。筆者の訪れた1983年7～8月のB村は、生育
したとうもろこしの間から土壁の家々が垣間みえ
るという光景であった。稲作についてみると灌漑
条件が以上のようによくないため、高収量品種の
導入は少なく、在来種の改良種が主体である。平
均収量は、改良在来種に肥料を投入している場
合、平年作で1000～1500觔/畝程度、干害にみま
われた1983年で400～800觔/畝程度である。

この他に多くの世帯で山羊、ヤードブを中心に
水牛、ムサハルの場合は豚の飼育を行なってい
る。近隣村のなかにはジャムイを対象とする乳業
の発達している例もあるが、B村の場合、水牛数
は多くて1世帯当り6頭程度で(非搾乳牛を含む)、
乳、および乳製品の大半は村内で売られている。
山羊はB村でもっとも多く見られる家畜であり、
大半の世帯で2、3頭を飼っている。山羊、牛、
水牛等の放牧はもっぱら子供の仕事であり1頭に
つき1カ月3ルピー程度の収入になる。山羊はこ
のように月ぎめによる放牧のほかにはバダイ、つ
まり売却時に代金を飼育した者と所有者が折半す
る方法、もとられている。

村内での賃労働は、大量の雇用労働力を必要と
する農家が村内に存在しないため、鋤入れや収穫
時を除けば、ジャングルからの燃料用の木材の運
搬、家作り、井戸掘りといった雑多なものが大半
を占める。また、B村をとりまく小丘陵では州政
府から請負権を取得した業者が建設工事・鉄道用
の碎石を行なっており、ムサハルを中心にその作
業場で働く場合もある。1983年11～12月の賃金
は、燃料用材1マン(約37觔)をジャングルから運
搬して6ルピー、鋤入れなどの農業労働、井戸掘
り等は食事なしで7～8ルピー、収穫労働は収穫
物の21～18分の1、碎石労働は出来高払いで通常
1日8～12ルピー前後、といったところである。

以上、B村の経済状況について簡単にふれた。この村の場合、天候に恵まれた年で、5～6人世帯の食糧の自家消費分を生産できる最小の規模が3～4ピガ、農業世帯としてかろうじて自立するのが5～6ピガというのが村の人々の一致した意見であった。ほとんどの世帯が、このラインに達しておらず、しかも村内の雇用労働の需要もかぎられている状態である。また、村から通うことのできる範囲にも、大きな労働需要をもつ都市はない。B村における出稼ぎ型労働移動の大量の存在は、このような状況のもとで生じたものである。

(注1) サンタルはビハール州東部サンタル・パルガナスを中心に、西ベンガル州西部、オリッサ州、アッサム州等に居住する指定部族。人口ではインドの指定部族のなかでも最大規模の部族の一つである。調査村はその居住地域の北端に位置し山地にそってその村落が点在する。その多くはサンタルのみ居住する村落であり、ザミンダール時代から一般村とは異なり1カ村を単位とする地代徴収が行われてきた。

(注2) ブーダン運動は、ヴィノバ・バーヴェ(Vinoba Bhave)によって、1950年代初頭から提唱された土地贈与運動、つまり地主に対してその所有地の一部を自発的に贈与することを求め、土地を持たない人々に分配しようとするもので、後にはさらにグラム・ダン(村落贈与)運動へと展開した。ビハール州はラジャスタン州などとならんでこの運動の最も盛んであった地域の一つであり、またB村が、ビハール州におけるブーダン運動の中心の一つであったガンディー主義者の共同農場に隣接しているといった事情があり、その周辺には、贈与された未開墾地にいくつかの村が土地をもたない人の入植によって建設されている。その多くは、ムサハルまたはサンタルの単一コミュニティー村で、1世帯につき1～2エーカーの土地を与えられている。贈与の対象となった土地のほとんどは開墾の困難な丘陵地で、現在も共同農場を中心として土地のレベリング、ため池などの建設が行われているが経済的な自立の達成は難しく村民の多くは、在来村で農業労働や砕石労働によって生計をたてている。

(注3) ここでいうカーストは、4姓としてのカー

ストではなく、地域社会のなかでより細分化されたジャーティーを示す。

II 出稼ぎ型労働移動の形態

第4表はB村からの労働移動の移動先、職種、をカースト別にまとめたものである。

移動先は、カルカッタとビハール・西ベンガル州境の鉱工業地帯(炭田)に集中しており、その他には県内の小都市、西ベンガル州のナディア県、北西インドのチャンディガルに若干名が移動しているにすぎない。

B村からの労働移動の圧倒的多数は、男子単身移動の出稼ぎ型である。家族を随伴して移動し、しかも村内に家と土地、あるいは家を残して世帯員のうちいずれかが定期的に帰村している世帯を家族随伴移動世帯と呼ぶとすると、このような世帯は全労働移動世帯の7割弱にすぎない。家族随伴移動が行なわれているのは炭田地帯で正規雇用されているクルミ3世帯、県内小都市の力車引き3世帯、炭田地帯の野菜売り1世帯で、移動先での生活状況の比較的安定している場合にかぎられる。

労働移動とカーストの間には明瞭な関連が見られる。村内の9カーストの全部において労働移動は行なわれているが、その程度はカースト間で大きな差がある。比較的労働移動の少ないカーストとしては、ヤーダブ、モディ、ナーイー、ドービー、労働移動の多いカーストはチャマル、クルミ、その他の3カーストはその中間にある。また労働移動の移動先、職種にも明らかなパターンがある。とくに、この村の最大のカーストであり移動労働者数でも最大のチャマルの場合は、ほぼカルカッタでの靴・チャパル(革サンダル)製造、路上での靴みがき・靴修理といった職種に、ナー

第4表 B村からの出稼ぎ先と職種

① カースト名	② 総世帯数	③ 出稼ぎを含む世帯数	④* ③のうち家族を随伴している世帯数	⑤ 出稼ぎ先と職種(世帯)														⑦ その他		
				カルカッタ							炭田地帯(ダンバード・ジャリア, アサソール等)									
				チャパル・靴製造販売 自営労働者	靴修理 靴みがき	既製服販売 屋台 路上	商店勤務	力車引き	雑役, その他	小計	炭 正 規 雇 用	鉱 下 請 雇	野菜 売り 茶屋	理髪	トラ ック 運 転 手	雑役	小計			
ヤーダブ	27	6 (6) [22%]	0								1 (1)	1 (1)						4 (4)	4 (4)	西ベンガル州ナディア県, トラック運転手
クルミ	6	6 (7) [100%]	3										6 (6)		1 (1)				7 (7)	
モディ	3	1 (1) [33%]	0					1 (1)				1 (1)								
テーリー	16	9 (10) [56%]	1						1 (1)	5 (5)		6 (6)			1 (2)			2 (2)	3 (4)	
ナーイー	13	4 (4) [31%]	0												4 (4)				4 (4)	
ドービー	21	11 (15) [32%]	3							5 (5)		5 (5)						1 (3)	1 (3)	チャンディガル, 工場労働者。ビハール州バランプル, 力車引き
チャマル	61	55 (88) [90%]	1	6 (12)	22 (36)	13 (21)	2 (2)	5 (5)		6 (8)	4 (4)	58 (88)						2 (2)	2 (2)	ビハール州シカンドラ, 官吏
ドッサド	15	6 (7) [40%]	0										3 (4)	1 (1)				2 (3)	6 (8)	
ムサハル	19	9 (13) [47%]	0						2 (4)			2 (4)		7 (9)					7 (9)	
計	181	106 (148) [59%]	8	6 (12)	22 (36)	13 (21)	2 (2)	5 (5)	1 (1)	9 (13)	15 (15)	73 (105)	9 (10)	8 (10)	2 (3)	4 (4)	5 (8)	6 (6)	34 (40)	

(出所) 筆者調査による。

(注) (1) 1世帯に複数の出稼ぎ地がある場合があり, ③=⑥+⑦とはならない。

(2) () 内は人数, [] 内は%。

* 家族を随伴しているものの, 村に土地と家屋または家屋が残され, 1年に1度以上帰村する世帯。

イーは炭田地帯での路上の理髪業に集中している傾向が強く見られる。また、鉱工業地帯での炭鉱における正規雇用を除けば、全ていわゆる雑業部門であり、組織部門の工業労働者は皆無となっている。

上記のような、カーストと労働移動の形態との強い関連はどのように考えられるであろうか。現在、発展途上国の多くで進行しつつある急激な都市化現象は、広範な雑業部門を各地に生み出している。この雑業部門は多くの場合、低賃金、劣悪かつ不安定な就労条件といった面とともに、流動的で参入に容易な部門として都市と農村をリンクする重要な役割を果たしているわけである。しかしインドの場合、この雑業部門すらが細分化され、特定のカースト、特定の地域の出身者にのみ有利な条件を与えるものになっていることが、B村の事例からうかがえよう(註1)。つまり、皮革業や理髪などのように特定のカーストと結びつけて考えられている職種では、他カーストからの参入が制限されるために、特定のカーストにとっては比較的容易に参入しうるのである。

しかし、このことは、カーストの「伝統的」職種が直接移動先での職種に結合していることを意味するものではない。B村の場合、ナーイーのように、村においても行なわれている理髪というこのカーストの「伝統的」な固有の技術が移動先でもそのまま生かされているケースもあるが、チャマルの場合は、古老の談によると「この村ができて以来、村では一度もチャマルを作ったことがない」のであり、チャマル＝皮革業という結びつきはカル Катタへの移動のなかではじめて顕在化したものである。

次に労働移動と土地所有規模との関連を見たい。第5表はカーストと土地所有ランク別に労働

第5表 B村における土地所有規模別労働形態
(単位: 世帯)

カースト名	区分	土地所有ランク					計
		I	II	III	IV	V	
ヤーダブ	A	1	2	3	20	1	27
	B			3	3		6
	C			1	19	1	21
クルミ	A			3	3		6
	B			3	3		6
	C				1		1
モデイ	A					3	3
	B					1	1
	C						
テーリー	A		2	7	6	1	16
	B			5	3	1	9
	C		2	3	2		7
ナーイー	A		2		3	4	9*
	B					4	4
	C		2		2	2	4
ドービー	A		2	1	16	2	21
	B		1		8	2	11
	C		1	1	10	—	12
チャマル	A	1	3	8	35	14	61
	B	1	2	7	32	13	55
	C		1	3	11	1	16
ドッサド	A			4	3	8	15
	B			3	1	2	6
	C				1	7	8
ムサハル	A				9	10	19
	B				6	3	9
	C				5	8	13
計	A	2	11	26	95	43	177
	B	1	3	21	56	26	109
	C		4	8	51	19	82

(出所) 筆者調査による。

(注) (1) 区分—A: 全世帯, B: 出稼ぎ労働を含む世帯, C: 村内労働を含む世帯。

(2) 土地所有ランクは第2表と同じ。

* 4戸不明。

移動と村内労働(ナーイー、ドービーなどサービス・カーストを含む)を表にしたものである。つまりこの表は、どのような層が村にとどまり、どのような層が労働移動を行なうかを見ようとしたものである。B村において人口規模の大きい指定カーストであるチャマル、ドッサド、ムサハルのカーストをとった場合、チャマルでは土地なし層においても労働移動が多いのに対し、ドッサド、ム

市における労働市場の性格の問題であり、B村の位置がカルカッタを中心とする東部インド経済圏の周辺部に位置していることによっても大きく規定されている。その他の大都市、とりわけボンベイ、デリー周辺、あるいは工業化の進行している諸都市に向けての労働移動を考える際には、B村の事例とは異なる枠組が必要となろう。

(注1) このような傾向は、たとえば、汚物処理や清掃といった通常不可触民の職種と結びつけて考えられる職種の場合は特に顕著で、これらの職種では地方自治体が正規に雇用する場合にも特定のカーストに集中することが多い。一例として、Karlekar, M., *Poverty and Women's Work: A Study of Sweeper Women in Delhi*, ニューデリー, Vikas Publishing House, 1982年。

(注2) たとえば, Dasgupta, B.; Ray Leishley, "Migration from Villages," *Economic and Political Weekly*, 1975年10月18日。

III 出稼ぎ先における相互扶助の枠組

——カルカッタの場合——

前節で述べたように、農村から都市への出稼ぎ型労働移動は、何よりもまず、移動先での諸条件、そのなかでの生活と就労の可能性にかかっているようである。その状況を、カルカッタにおけるチャマールを中心として考えてみたい。

第4表に見るとおり、B村からカルカッタへ何らかの形で出稼ぎ型労働移動を行なっている男子の総数は105人に及んでいる。カースト別内訳は、チャマール88、ドービー5、テーリー6、ムサハル4、ヤーダブとモディ各1、職種で見るとチャパル・靴の製造販売、路上での靴修理・靴みがきといった皮靴関係が69、力車引き13、既製販売7、雑役その他15、商店勤務1となっている。

このうち力車引きを主たる職業とするチャマール、ムサハルの15人余は1カ所で共同生活を行な

っている。またチャパル・靴の製造販売を職種とするチャマールも家族・親類を核とした同一カーストによって構成される5～6カ所の作業所において共同生活をしている。路上での靴みがき、靴修理を職種とする労働者は、ほとんどの場合、その路上が生活場所でもあるが、カルカッタ南部の1家族を除いて北カルカッタに集中しており相互に連絡をとりやすい形になっている。

このような共同生活の単位は、(i)家族・親類、(ii)同一カースト、(iii)職種、(iv)村落の四つの枠組が相互に関連しながら形成されている。

第7表はその関連を概略的に示したものである。共同生活の単位の小さい場合は、当然のことながら、(i)(ii)(iii)(iv)のいずれにおいても単一の構成になっている。単位が大きくなる場合には、チャパル・靴製造販売グループに見られるように、雇用関係を内包しつつ村内の同一カーストの複数家族、一部には縁戚関係のある他村同一カースト家族等を含めてカーストの延長線上に拡大していく場合と、力車引きの場合のように村内の複数カースト(この場合はチャマールとムサハル)に拡大する場合が見られる。前者は、皮革業という職種の性格がその理由であろう。後者の力車引きの場合はB村出身者にかぎらず、村単位で居住するが多い。カルカッタの力車引き業について調査したある民間団体のレポートによると、その90%以上がピハール州出身者、なかでもムザッパルプル、ムンゲル等数県の出身者で占められ、多くの場合、出身村の単位で生活していることが報告されている(注1)。この背景には、力車引きという性格上、住宅条件のとりわけ悪い商業地域の只中に居住せざるを得ないこと、力車を貸借する際の便宜といったことが考えられよう。

上記のように、カルカッタにおける共同生活の

第7表 カルカッタにおけるB村出身移動労働者の生活単位

共同生活の単位	(i) 家族・親類	(ii) カースト	(iii) 職 種	(iv) 村 落	共同生活単位内での 雇用関係の有無
小 集 団 路上の靴みがき・靴修理	◎	◎	◎	◎	無
既 製 服 販 売	◎	◎	◎	◎	無
大 集 団 靴・チャパル製造販売	○	◎	◎	○	有
力 車 引 き	○	○	◎	◎	無

(出所) 筆者調査による。

(注) ◎ 単一の集団によって構成される場合。

○ 二つ以上の集団によって構成される場合。

単位は、おおむね、出身村における生活のネットワークと重複しつつも、より詳細にみれば、複数カーストの共同生活、同一カースト内での雇用・被雇用関係など、異なる様相を含むものである。しかし、このような変化の萌芽を含みつつも、B村出身労働者の共同生活の単位は、若干のメンバーの変化はあるものの、長期にわたって安定的に継続している。その背景には、低賃金、居住条件の劣悪さとならんで、カルカッタにおける雑業部門の不安定さ、あるいは、雑業部門からより安定的な部門への移行の困難な状況といったなかで、移動労働者は移動開始時のみではなく、その後も長期間にわたって何らかの相互扶助の枠組を必要とするという事情がある。そのことをいくつかの事例で見てみたい。

<事例1>力車引きグループ

B村出身の力車引きグループが共同生活をする地区は北カルカッタの混雑した裏町の一画にある。古い建物にたてかけられたひさしの下の幅3m長さ10mほどの通称「ヴェランダ」は3区分され、それぞれムンゲル県内の3カ村出身の力車引きが15~20人単位で生活しており、B村出身者はその奥の一画を占めている。この共同生活の場は20年ほど前からということで現在、15人ほどのチ

ャマール、ムサハル両カーストの集団が生活している。力車は1交替5ルピーほどで所有主から賃借するもので、早朝から午後3時まで、午後3時以降深夜までの2交替である。現在カルカッタ市当局は、力車に対して数量、営業地域両面で制限を加えており、力車引きに対する許可証の新たな発給も停止する措置をとっている。雑業部門のなかではまだしも安定的な職種である力車引き業から締め出されることはより不利な雑役・荷運びといった職種への転落を意味するものであるから、営業許可を得ていない力車の賃借を含めて就労機会を確保するためにはさまざまな形での顔つなぎも重要となってきた。またこういった状況のなかで力車の賃借料も増額されており、生活費の切り詰めはより切迫したものとなってきた。この力車引きの共同生活の単位は、カルカッタで働くB村出身の出稼ぎ労働者のそれとしては最大のものであり、他職種に働く人々を含めて情報センター的な役割を果たしている。ほとんどのメンバーは、村には年に数回、計2、3カ月~6カ月は帰村している。

<事例2>カルカッタ南郊の路上靴修理グループ

これは1家族(兄弟3人)によるグループで、カ

ルカッタ南郊の幹線道路上で働いている。この場所は3兄弟の父親が北カルカッタから約20年ほど前に移動してきて以来変化していない。「この辺りが草っ原で道は牛車が歩いていた」頃から同じ場所にいるため、場所の「確保」には問題はなく、また靴の修理屋も少ないため修理賃も北カルカッタに比較してやや高い。銀行から融資を受けて小規模ながらチャパルの製造を始めている。しかし依然として路上での生活には変化はなく、夜は道具類を収納した戸棚の横で寝ている。週に一度は北カルカッタへ原料の仕入れに行き他のB村出身者とも連絡をとっている。村には3兄弟のうち1人が交替で帰っている。

＜事例3＞北カルカッタでチャパルの製造・販売をしているグループ

このグループはB村出身者のなかではもっとも成功しているグループである。父親と成人した2人の息子その1家族を雇用主としてそのイトコなど村内の2家族、および村外の1家族を加えた計10人程度が、路地裏の一画で共同生活をしている。10代前半からカルカッタで働いている2人の息子はベンガル語にも不自由はない。このグループで雇用されている人々は、少年時代から親戚関係にある雇用主のもとで見習いとして加わり次第に技術を身につけていくわけである。雇用者・被雇用者とも年に数度は帰村し農作業を行っており、筆者が村を訪れていた期間も、たえず何名かが帰村していた。

上記のように、B村の事例は、移動先においても強い村のきずなが生きていることを示している。出稼ぎ労働者は1人の労働者として都市の労働市場に参入するわけではないのである。このようなきずなの強さを象徴的に示すのが、カルカ

ッタの移動労働者と村を定期的に結ぶ女性の存在である。

B村の場合、カルカッタから村への仕送りは、ムサハル・カーストの1人の中年の女性が10日に1度往復することによって行なわれている。インド国内の出稼ぎ送金は通例郵便為替によることが多いが、B村の場合、出稼ぎ労働者の大半が文盲、収入は日銭、しかも1都市に集中しているということにより迅速かつ確実な方法として、このような方法が現在の女性の実母の代から始まったという。彼女は仕送りの金を届けると同時に、カルカッタでは散在する共同生活の場を廻り村のニュースを伝え、移動労働者相互間の連絡役を果たし、時にはカルカッタに夫を訪ねる村の女性たちを連れてゆく。彼女の手数料は送金額の5割、汽車賃等を引いて150ルピー/月額ほどの収入になるという。先代の実母が亡くなったときに、村の人々の「信任」を得て後を継いだ。彼女自身は文盲であるが数十人分の仕送りを「一度の間違いもなく」届けたということで村の人々の信頼は厚い。彼女がカルカッタからお金とニュースを携えて夜行列車で帰る朝は村の女性たちにとっては楽しみなどきでもある。必要が生みだした新しい村の制度となっている。

(注1) UNNAYAN 編, *Rikshaves in Calcutta*, カルカッタ, 1981年。

IV 出稼ぎ型労働移動とB村の変化

以上述べてきたような大量の出稼ぎ型労働移動の存在は、当然のことながら、B村の社会に大きな影響を与えている。ここでは送金の持つ意味、そのカースト内・カースト間の諸関係にもたらしたインパクトについて見てみたい。また、とくに

農村開発計画との関係で、村全体の变化についても考えてみたい。

1. 送金

現在移動労働者がどの程度の送金を行なっているかという点については、残念ながら正確な数値を把握するのは困難であるが、カルカッタに働く力車引き、非自営の皮革関連業種従事者の場合、月額にして150~250ルピー、つまり10日に1度の送金で1回50ルピー前後という答がもっとも多かった。ダンパード等の鉱工業地帯の場合はそれよりも若干多い場合もあるようであるが、いずれにしても月額400~500ルピーを超えることはほとんどないといってよいだろう。しかも、多くの移動労働者は年間2、3カ月から長い場合は半年近くも帰村するのであるから年間をとおして平均をとればさらに少額となる。先にも述べたようにB村の場合、ほとんどの世帯において農業生産は自家消費分を下回っているため、送金のほとんどは食料および衣料などの日常必需品の購入に充てられており、農業への投資に向けられる割合はほとんどないといってよい。

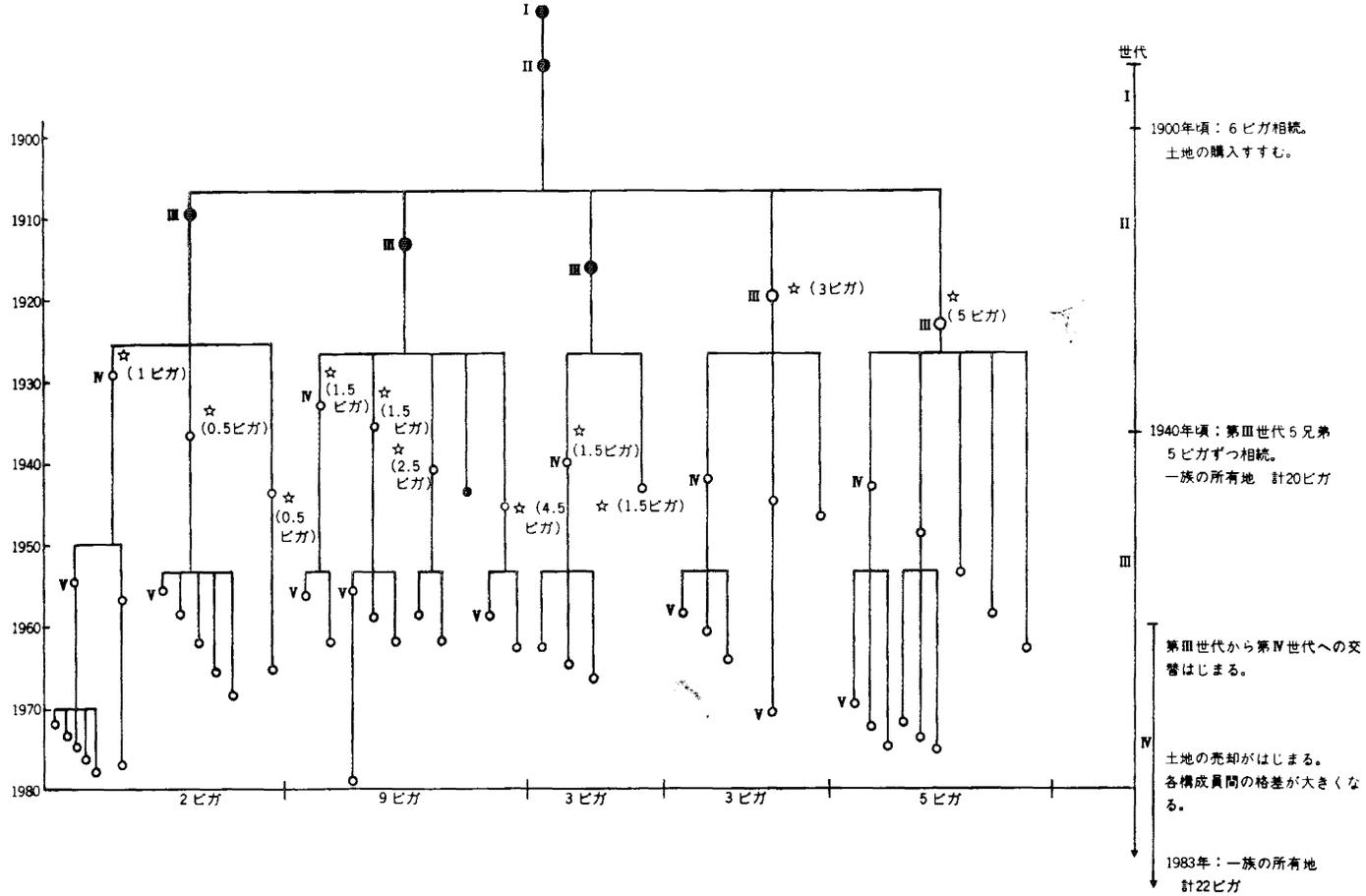
しかし、B村からカルカッタ方面への出稼ぎ型労働移動の開始された1920年代から独立直後までの時期をとると、その様相は著しく異なっている。村の古老たちなどの話によると少なくとも1950年代の初期までは、出稼ぎ送金による土地の購入が可能であった。ある老人の話によると、1940年代中期(独立直前)土地1ビガの価格は60~100ルピー、その当時1カ月の出稼ぎによる送金が月額約10ルピー程度であった。土地の価格はその後1950年代に1ビガ100~200ルピー、60年代後半で1ビガ1000ルピー、筆者の訪れた1983年末で1万6000~2万ルピー程度にまで上昇している。つまり1940年代中期において土地1ビガの価格は出

稼ぎによる送金の約半年から1年分に相当していたのに対し、83年末では、送金額を仮に月額200ルピーと想定した場合、実に7~10年分に相当するのである。

さらに送金のうち、どの程度を土地購入などに振り向けることが可能であるかを考えると、この変化は一層深刻である。第2図はB村のチャマールのうちもっとも有力な家系の男子成員を生年で図示したものである。この一族の場合、B村への移住第II世代が世帯主であり第III世代が幼年期から若年労働力に育っていた1930年代頃までは土地の購入が可能であったこと、また、第III代が世帯主となっていた40年代末までは、均分相続が行なわれても、自給ラインをやや上回る4~5ビガを維持することが可能であったことを見てとれよう。その後移住第IV・V世代が世帯主となる1960~80年代にかけて、土地の購入の動きはとまり、均分相続による所有規模の零細化は、この有力な家系の一族さえ、ほとんどを零細農に転落せしめている。この家系の第III世代の4男の話によると1930~40年代にかけて、この一家の男子は全員カルカッタで働き、村の農業は先述のジャン制度によるムサハルの年雇労働者が行なっていた。農業生産は、「毎日米を食べても余っていた」という状況で、送金のうちかなりの部分を土地購入に振り向けることが可能であったという。このことは見方を変えると、出身村において土地所有の拡大が可能であったために移動地での収入が移動地に蓄積されなかったという結果をもたらしている。長い場合は3世代以上も同一地に移動労働を行なっても移動先には資産と呼べるものはほとんどないことの一因はこの点にあらう。

ところで現在、B村における土地価格は、1ビガあたり1万6000~2万ルピーで、この地域の生

第2図 あるチャマール家系の土地の細分化（B村）



(出所) 筆者の調査による。

(注) (1) ○生存中の者、●死亡した者。(2) ○●の位置は生年を示す。(3) 若年死亡者を除く、男子のみ。(4) ☆は現在の世帯主、()はその所有土地面積。

産性を考慮するならば異様な高価格となっている。この背景にはいくつかの理由が考えられる。すなわち、(1)比較的近年まで耕作地の拡大が可能であったこの地域においても開墾による耕地の拡大が独立と前後してほぼ頭打ちになったこと、(2)1950年代の中期にムンゲルとジャマイを結ぶ州道が整備されたところからジャマイ等の商人のなかに土地を求める動きが始まったこと、(3)掘抜井戸の建設が自然条件によって困難であるといった土地生産性を向上させる条件が限定されているため農業投資は耕地の外延的拡大に向けられる傾向のあることなどである。このように土地に対する需要の強いなかで、零細化した農民は出稼ぎ型労働移動によって、その零細化した所有地を支えるために土地の移動がきわめて限られるという事情がある。土地の売買は干害の続くこの3年間に増加していると村の人々は語っているが、筆者の知り得た限り、その移動は1~2カッタ(1カッタ=1/20ビガ、約0.0154)程度の小規模なものであった。しかも出稼ぎ型の移動労働者は主要な農作業を帰村して行なうことが可能であるために、売買のみならず貸借関係も限定されている。このようななかで、零細農の厚い層が存在する一方、在村の農業世帯にとっては所有面積、経営面積の拡大は困難なものとなっている。

2. カースト間、カースト内の社会関係に与えた変化

すでに述べてきたように、出稼ぎ型労働移動の行き先、職種等がカーストと強く結びついているために、当然のことながら、カースト間にも影響を与えている。概括的に言うならばB村の場合、近隣村と比較して指定カーストの地位が相対的に高く、また比較的早い時期に出稼ぎ型労働移動を開始したチャマル・クルミ等がそのメリ

ットをより多く受けていると言えよう。

出稼ぎ型労働移動が村内におけるカーストの位置に大きな影響を与えた典型的な事例としてムサハルがある。この地域のムサハルは従来「ジャン」と呼ばれる隷属的要素の強い年雇農業労働者であった。現在でも近隣村においてはそのほとんどが農業労働者であり、村はずれの一画に居住し、村の社会階層の最下層に位置づけられている。ところがB村ではムサハルの約半数の世帯が出稼ぎ型労働移動を行ない、残りの世帯が村において農業労働、近くの碎石現場での賃労働、村内の雑多な賃労働等に従事しているが、村内にとどまっている層においてもかつてのような年雇型の労働は現在では見られなくなっている。

この背景には「隷属的労働者」(bonded labourer)が法的に禁止される^(註1)1970年代以前にすでにB村においては年間を通じて雇用労働力を必要としかつ扶養しうる規模の農家が消滅しており、出稼ぎ型労働移動が開始されていたという事情がある。雇用主側であったヤーダブ、チャマルの老人たちが「昔のジャンはカルカッタへ行ってしまった」と語るような状況になっているのである。

ところで、出稼ぎ型労働移動は固定的であった村内のムサハルの雇用形態を流動化させたが、どの程度まで村内におけるかれらの地位の向上をもたらしたであろうか。B村のムサハルの居住区は、チャマルの居住区のはずれに位置する。かつては両カーストの居住区は若干の距離をもっていたと考えられるが、双方の家屋数が増加するにしたがって現在ではその境界は入組んだ状態になっている。チャマルの女性とムサハルの女性がその境界近い道端で話をしているのは普通にみられる光景であり、先述のカルカッタを往復するムサハルの女性が帰村した日などはムサハルを含む

複数カーストの多くの女性や老人・子供が彼女を囲んで話をしているといった光景も見られた。チャマルの経済力の低下とムサハルの経済力の上昇は両者の間の相対的な経済力を近づけており、近隣村で見られるような明瞭な格差はB村では消滅している。同様な関係の変化は、出稼ぎ地においても、カルカッタの力車引きの共同生活に見られるように、生じているのである。しかし、一方ではいまだにムサハルのみ従事すべき仕事と考えられている職種が若干のこっている点など、このような動きにも限界はあるようである。

B村の場合、上位カーストの欠如、村内雇用・被雇用関係がきわめて少ないことなど、労働移動がカースト間関係に与える影響を一般的に考える際には事例となりにくい面も多い。しかしB村の事例からも少なくとも以下のような点は指摘しうるだろう。第1点は、労働移動は村内の社会関係にある程度の流動化をもたらすこと、第2点はそれによってもたらされる経済力の向上がカーストの村内における社会的な地位をある程度までは向上させうることの2点である。第2点に関して言えば、しかし、その可能性は現在かつてほどの希望を与えるものではないことは、先のチャマルの事例に示すとおりである。

出稼ぎ型労働移動はまた、カースト内部の社会関係にも大きな影響を与えている。村に残る者と移動する者、出稼ぎ条件の善し悪しは、同一カースト内部にも経済的格差をもたらすチャマルの事例にもみられるように雇用・被雇用の関係を内包する場合も生じている。また、チャマルのなかで皮革関連業種から離れて最近既製服の路上販売をはじめたグループは、B村のチャマルの共通の自称であるラービダース姓ではなくダース姓を名乗りはじめるといった動きもある。その一方

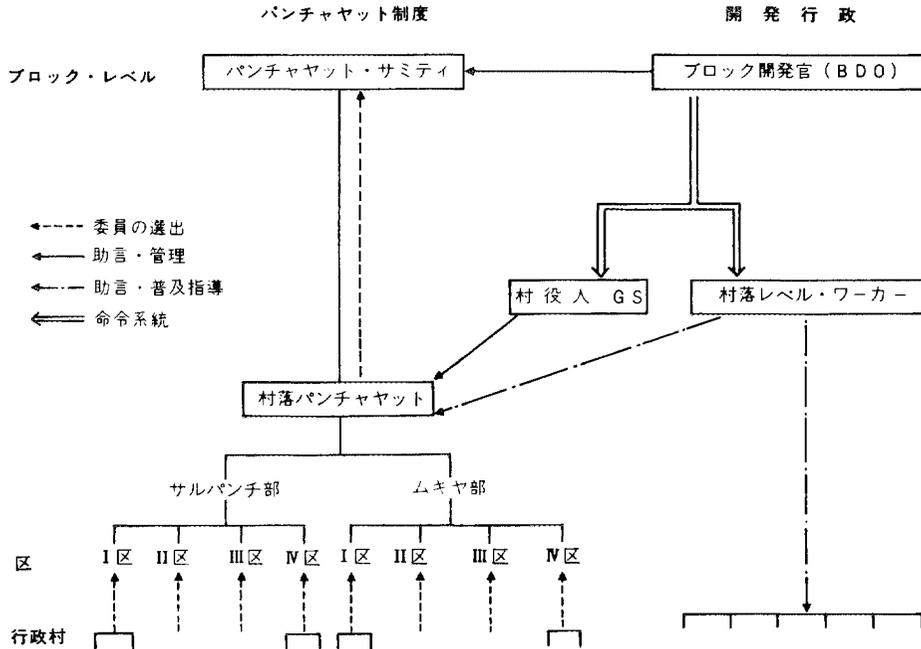
では、出稼ぎ型労働移動を契機に相互扶助の枠組としてのカーストの機能はむしろ強化されてきている。このような状況は、B村におけるカースト制度の現時点における意味が、従来のそれとは異なったものに変化してきていることを予想させるものである。従来、カースト制度は一般的に、安定的な生産関係に基礎をおく階層的な身分関係であり、それぞれのカーストは、少なくとも村落といったミクロな場面をとればほぼ単一の経済的・社会的特色を持つ集団として捉えられ、そのことを基盤としてカーストのコミュニティとしての性格が論じられてきた。しかしB村の事例は、このような基盤の成立しにくくなった状況下で、カーストが内部にさまざまな異質性をはらみつつ相互扶助の枠組としての機能を強化させていることを示している。見方を変えれば、カーストに代わり得るなんらかの保証のシステム、とりわけ、経済的・社会的弱者層のそれが、現在のインドにいま形成されていないとも言えるかもしれない。出稼ぎ型労働移動はインド農村全体から見れば限られた現象ではあるが、そこに見られるこのような動きは農村部におけるカースト制度の変容を考えるうえで一つの視点を与えるものと思われる。

3. 村の変化——パンチャヤット制度と開発行政

ここでは村全体の変化をパンチャヤットの活動状況と開発行政を中心にみてみたい。

周知のようにパンチャヤット制度は、インドの農村部のほぼ全域で実施されている行政・意思決定の制度で、通常、村落パンチャヤット(一行政村ないし数行政村)、パンチャヤット・サミティ(開発ブロック・レベル)、ジラ・パリシャド(県レベル)の3段階に分かれている。第3図は、ブロック・レベル以下のパンチャヤット制度と行政機構を、B

第3図 パンチャヤット制度と行政機構（ブロック・レベル）



(出所) 筆者作成。

村の位置するビハール州の場合について図示したものである。

パンチャヤット制度の末端である村落パンチャヤットは、行政村Bを含む地域の場合、4区に分けられた6行政村によって構成されている。つまり1区は1ないし2の行政村によって構成されている。村落パンチャヤットには、開発および一般的事項を掌握するムキヤ部と司法を掌握するサルパンチ部がおかれ、それぞれ1区より1名の選出委員、1名の任命委員(全選出委員による任命)の計2名の委員、および選出による村長(ムキヤ)の計9名によって構成されている。目下のところ、この地域ではサルパンチ部はほとんど活動しておらず、ムキヤ部が村落パンチャヤットの中心となっている。それぞれの村落パンチャヤットにはブロック開発官(block development officer, BDOと略す)

から村役人(gram sevak, GSと略す)が派遣され事務的事項の処理にあっている。また、農業・農村開発については、BDOの下に位置する村落レベル・ワーカー(village level worker, VLWと略す)が随時連絡をとることになっている。このGSとVLWを通じてさまざまな行政事項や農村開発プログラムが村落パンチャヤットにもたらされるわけである。

B村を含む地域の最近のパンチャヤット選挙は1978年に実施された。1978年以降の村落パンチャヤット・ムキヤ部の構成は、ヤーダブがムキヤを含めて4名、ラージプート1名、指定カーストのチャマル、ドッサドが各1名で計2名、その他の2名が中間カースト、となっている。このうち5名は、5ビガ以上の自作農、2名が教師とソーシャル・ワーカー(註2)、1名が商店主、1名不明であ

り、全体としてみるとヤーダブの自作農を中心とする色合いが濃い。1978年以前については、ムキヤとムキヤ部の選出委員に関してのみその構成を知ることができたが、計5名のうち、ラージプートがムキヤを含めて2名、ヤーダブ、ムスリム、チャマールが各1名であり、78年の選挙を境にパンチャヤットの中心が、地主層を中心とするラージプートから、人口の多いヤーダブに移行したことがうかがえる。1978年以降のムキヤ部の構成メンバーのうち、チャマールとドッサド、つまり指定カーストの委員2名は、ともに1行政村で1区となっている行政村Bからの選出任命委員であり、いずれもB村に居住している。指定カースト人口比の高いB村を中心とする行政村B以外からは、指定カーストの委員はでていないわけである。

活動状況をみてみると、1982年3月から83年5月までの1年2カ月間に、ムキヤ部は、ほぼ1カ月に1回、計13回の会合を持っている。GSの作成した議事録によると、議題は、現在建設途中で資金不足のため放置されているパンチャヤットの建物の資金調達問題、この地域で実施されようとしているIRDP、および全インド農村雇用プログラム(National Rural Employment Programme, NREP)の情報と実施方法について、年金対象者への年金未払問題、などである。出席者は毎回5～6名、ヤーダブ委員の出席率がきわめて高い。

先述のように行政村Bからは、いずれもB村に居住する指定カーストの2名がムキヤ部の委員となっている。1名はチャマールの有力な家系に属し、もう1名は、ドッサドの学校教師であるが、委員会への出席率は低い。チャマールの委員は、3ビガ程度の土地を所有しており彼自身は農業に従事しているが、2人の息子はいずれも村外にお

いて就業しており、また学校教師の方も農業世帯ではなく、日中に開催される委員会への出席は時間的にも無理である。B村の場合、人口数の多い農業を基盤とするカーストが存在せず、そのようなカーストのリーダーもまた存在しないことが、ヤーダブを中心とするこの地域のパンチャヤットの活動のなかでのB村の立場を弱くしているようである。20年来の懸案となっている崩壊した取水口と水路の修復がなかなか実現されないような状況の背景には、こういった地域社会での発言力の弱さがあるように思われる。

こういった状況のなかで農村開発プログラムはどのように実施されているのであろうか。

B村は現在IRDPの対象村であり、IRDPの発足する1981年以前はDPAPの対象となっていた。DPAPの実施状況についてはBDOのもとにも資料がなく、このブロックにおける全般的な実施状況は不明であるが、B村にみるかぎり、建設費用の50%の低利貸付によって「パッカー」的な、つまり内部をレンガやセメントで補強した長期間使用可能な浅井戸の建設に力点がおかれたようである。B村には、このパッカー井戸が10カ所あるが、このうち筆者が確認しえた限りでは5カ所がDPAPによるものであった。このうち4カ所は、先述のチャマールのパンチャヤット委員を含むチャマールの所有であり、それぞれの所有地の灌漑に使用されている。IRDPは、この地域では1981年から実施に移され、B村は1983/84年の対象村となっている。筆者が訪れた1983年末はその対象世帯決定手続きの段階で、BDOがB村にまできて申請手続きが行なわれていた。IRDPは、小農、零細農および農業労働者世帯、とりわけそのなかで指定カースト・指定部族を優先的な対象とし、さまざまな形で収入の増加を図ろうとするものであ

第8表 Lブロックにおける IRDP 実施状況 (1982/83年)

(単位: 世帯数)

プログラム	対象数	対 象 内 訳					
		指定カースト	指定部族	他	小 農	零 細 農	農業労働者
乳牛	199	113	34	52	7	67	125
ジネス*	47	2	2	43	3	44	—
力車/馬車	21	13	—	8	2	15	4
牛車	21	3	6	12	—	14	7
山 羊	10	6	—	4	1	4	5
豚	8	4	—	4	—	4	4
ディーゼル・ポンプ	13	5	—	8	11	2	—
計	319	146	42	131	24	150	145

(出所) 筆者調査による。

(注) * 村内の小店舗の開業資金など。

る。B村を含むブロックでは、1981～85年の5カ年間に計60カ村3700世帯を受益世帯とすることを目的にし、実質的には1982/83年からスタートした。第8表は1982/83年のこのブロックにおける実施状況である。これにも明らかなように、このプログラムは農業の基盤整備・技術革新を直接目的とするものではなく、各世帯に即効的な収入の増加を図るものである。資金面では中央・州政府が各々50%を負担することになっているが、BDOの話によると、年4、5回に分割して送られてくることになっている資金が予定より遅れることがあり、実施上の問題となっているとのことであった。行政村B全体で予定受益世帯は100世帯、人口比等から考えるとそのうち50%以上がB村になるとされている。

現在実施に移されているもう一つのプログラムはNREPで、これは、地域住民を雇用することによって農業用ため池、水路、道路等のインフラストラクチャーの整備を行なおうとするものである。1982/83年から実施に移されている。資金面ではIRDP同様、中央・州が50%ずつを負担し1ブロックにつき1年間で50万ルピー規模の事業を予定している。雇用された労働者に対しては一定

量の穀類と6ルピー程度の日当が支払われる。この計画でなにを建設するかについては、各村落パンチャヤットからBDOに要請をし、BDOが決定することになっているため、現在B村を含む村落パンチャヤットにおいても計画案が討論されている。各々の村落パンチャヤットの内部でどの計画が優先的にBDOに要請され、また一つのブロック内でどの村落パンチャヤットの計画が実施に移されるかという点については、村落パンチャヤットやブロック内での各村落、あるいは特定のグループの発言力が重要なポイントとなってくるわけである。注目されるのは、B村においても、このNREP実施案の作成の過程で、長年の課題であった取水口と水路の補修を同プログラムのもとに行なうように運動する動きが、従来のチャマールを中心とするパンチャヤットの枠組ではなく、ある程度以上の土地を所有する複数のカーストに属する在村農家世帯を中心に出てきていることである。とくに、この村では少数者であるものの地域的には有力なカーストであり、かつ在村率の高いヤーダブを中心に何回かの会合がもたれていることは新しい動きと言えよう。

以上見てきたように、B村は従来、中核的な農

民層を欠く村として、村全体の活動には消極的であった。そのなかで、DPAP、IRDPといった農村開発プログラムは、対象世帯に資金を分散するプログラムであり、実施の過程で村民間の協力を要請する性質のものではなく、またその恩恵も各々の対象世帯に吸収され村全体にインパクトを与えるものではなかった。B村の場合、最大のカーストがチャマールという社会的・経済的弱者層に属し、かつその成人男子の大半が1年の大半を村外で生活し、出稼ぎ型労働移動による送金に強く依存しており、出稼ぎ型労働移動においては強い村の紐帯が存続しながら、出身村においては逆に、生産活動の要である灌漑施設の補修すら実現困難な村であったと言えよう。対象を特定の世帯にしぼった1970年代からの農村開発諸プログラムも、このように弱体化した村の活動を活性化させる性格のものではなかった。

そのなかで、ヤーダブを中心とする最近の取水口、水路の補修を求める動きは、大きくみれば、この地域全体のヤーダブの台頭に呼応するものであり、チャマールの出稼ぎ型労働移動による経済力の向上に頭打ちの様相が明瞭になってきている現在、この村の今後を考えるうえでは重要であると思われる。

4. 出稼ぎ型労働移動と教育

以上、B村における出稼ぎ型労働移動のさまざまな側面を述べてきた。全体としてみるならば、より安定的な雇用機会が大量に創出されない限り、加速度的に早まる土地所有規模の零細化のなかで、B村の出稼ぎ型労働移動労働者のような層によりよい未来を考えることは不可能と思われる。そして、現在あまりにも狭いその「安定的な雇用」の門をめざして、カレッジ・レベルの教育を子弟に受けさせようとする人びとがB村においても増

加している。ここではこの教育の問題にふれる。

B村には第5学年までの公立小学校1校、近隣のガンディー主義者の共同農場が運営する「センター」(第5学年まで)が1校あり、第6学年以上は隣村Mの中学校、または、共同農場内の職業訓練校を兼ねる寄宿制学校に行くことになる。ジャムイ市内には、パガルプル大学傘下のカレッジがあり、バスを使って通学可能である。共同農場の運営する「センター」は昼食と衣類が支給されるという事情もあって希望者が多く選抜が行なわれている。ともあれ公立小学校とこの「センター」を合わせると村内の全児童の大半が一度は登録されている。しかし、中途の脱落、不規則な登校状況、教材・教員の不足などの問題も多く、とりわけ女子の場合、学校には登録したものの「名前も書けない」例も少なくない。B村から中学校へ通学していることが確認できた生徒数は5名(全員男子)である。したがって大半の児童は第5学年以下のレベルで教育を終え、父・兄弟や親類とともに出稼ぎに出たり、村で家畜の世話などの労働、あるいは幼い兄弟の面倒を見るなど家事手伝いといったさまざまな形で働きはじめているわけである。このようななかで、カレッジ・レベルに通学中の男子生徒数は5名と比較的多く、就労か教育かの選択は第5学年終了時にあらかじめ決まってしまうことを示している。

B村で現在、カレッジ・レベルで学んでいる5名と過去に終了した2名について、まとめたのが第9表である。

このうち、1名以外は全員指定カーストに属し奨学金を得てカレッジで学んでいる。この表からカレッジ・レベルまで教育を受けているのは、奨学金を得ることのできるカーストの比較的経済状況のよい層に偏っていることとともに、本人以外

第9表 カレッジ・レベル卒業／通学中学生の家庭状況

	カースト	年齢	父親の教育水準	男子兄弟数とそのなかでの順位	経済状況	本人以外の男子兄弟の教育状況	卒業後の就業
1	チャマール	30 (卒)	識字	2-1	農業(3ビガ)	弟は第8学年まで。現在隣村で下級事務員。	県内で小学校教師失業中
2	チャマール	25 (卒)	文盲	5-5	農業(5ビガ)、兄による村内商店経営および出稼ぎ	4人の兄はいずれも第5学年未満。現在は、それぞれ、農業、小店舗経営、カルカッタで皮革業に就労。	
3	ヤーダブ	19	文盲	2-1	農業(5ビガ)	弟は第5学年まで。現在農業。	—
4	チャマール	19	文盲	4-4	農業(兄弟4人で3ビガ)および兄の出稼ぎ	兄3人はいずれも第5学年まで。現在、1名農業、2名カルカッタで既製服販売。	—
5	チャマール	19	文盲	4-2	農業(4ビガ)および兄弟の出稼ぎ	兄弟3人はいずれも第5学年まで。全員カルカッタで皮革業種に就労。	—
6	ドッサド	18	カレッジ卒 ²⁾	6-1	父親は教師	5人の弟は全員中等・小学校に在学中。	—
7	ドービー	18	文盲	3-2	農業(兄弟3人で3ビガ)	兄は第8学年まで。弟は現在中学校在学中。	—

(出所) 筆者調査による。

(注) 1) たとえば、3-2は、3兄弟中2番目をさす。

2) 他村出身。

の男子兄弟が中学以上の教育を受けているのは7名中3名にすぎず、その他の場合は、男子兄弟中1人のみが高等教育を受け、他の兄弟は若年から出稼ぎなどで働いていることを見てとることができよう。土地所有3～5ビガはB村において農業世帯として自立しうる限界的なラインであり、次世代での細分化を阻止するためにこのような形での「高等教育」が普及しつつあるのである。そしてインド、とりわけビハールの雇用状況下では、この多大の犠牲のうえになされている高等教育が必ずしも安定的な雇用をもたらすものでないことも明らかであろう。

しかし、指定カーストに対する奨学金制度のもとで、ともかくも現在、かつては考えられなかった教育水準を得た若い世代が成長しつつあることは注目に値しよう。それがただちに、農村部における弱者層の経済的向上をもたらすものではないとしても、この若い世代が農村社会の中心となる時代には、農村社会のさまざまな場面で、発言力を強めていく大きな力になるのではなからう

か。

(注1) 「隷属的労働制度(禁止)法, 1976年」(Bonded Labour System [Abolition] Act, 1976)によって法的に禁止された。

(注2) これらの教師とソーシャル・ワーカーは、ともに近隣のガンディー主義者の共同農場に属している。

おわりに

以上、ビハール州のある農村における労働移動と村の変化について述べてきた。B村の場合、労働移動は、比較的経済状況の良い世帯にみられる家族随伴型の移動の数例を除くと大半は、雑業部門職種での男子単身移動である。このような出稼ぎ型の移動は、限られた程度ではあれ、B村の社会的・経済的な諸関係に流動化をもたらし、とりわけ、指定カーストの諸コミュニティの村落内での地位には大きな変化を与えるものであった。その一方では、大量の出稼ぎ型労働移動は、農村部において零細農の広範な存在を可能にし、

村やコミュニティーの急激な変化を押しとどめるものでもあった。出稼ぎ型労働移動の実現と維持には、このようにして維持された農村生活に根ざす、カーストや村といった相互扶助の枠組が、大きな役割を果たしてきたのである。

しかし、B村に見るかぎり、速まる土地の零細化のなかで、出稼ぎ型労働移動に依存する形の村落社会の維持は、今後ますます困難なものとなっていくであろう。雑業部門自体が細分化され参入の容易でない部門であることは、すでに見てき

たとおりである。大規模な安定的雇用の創出、雑業部門から安定的な職種への流動化を可能とするような産業構造の変化、それに見合う教育の普及といった、この地域の社会・経済上の大きな変化をB村は今切迫した課題としているのである。

〔付記〕 本稿は筆者が1981年11月～83年11月に実施した海外派遣員としての研究成果の一部である。

(アジア経済研究所調査研究部)